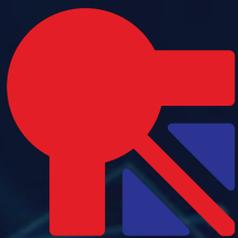


年次 報告書

2020-2021



日英学生会議 2021:

倫理と科学技術

Madalina Benderschi

Yee Hang Chong

Nicole Doyle

Mizuho Ina

Angel Rose

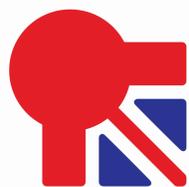
Mai Sugimoto

David Watson

Yume Araki

An Yokota

Sakura Doi



日英学生会議
UK-Japan Student Conference

uk.jp.student.conference@gmail.com
www.uk-jpstudentconference.com

目次

日英学生会議の理念

本会議のテーマ「倫理と科学技術」

イベント

ロンドンイベント

東京イベント

プログラム構成

スケジュール

スポンサー・協力

事前学習

本会議講義・プログラム内容

ザック・ウェストン氏

ロブ・ブラック氏

アーロン・ガートラー氏

ビデオポッドキャスト: User Not Found

シャハラ・アリ博士

アンディ・ミア教授

エマニュエル・トラノス教授

映画: Life in a Day

エリザベタ・ベルサーチェ教授

ジョディー・ギンズバーグ氏

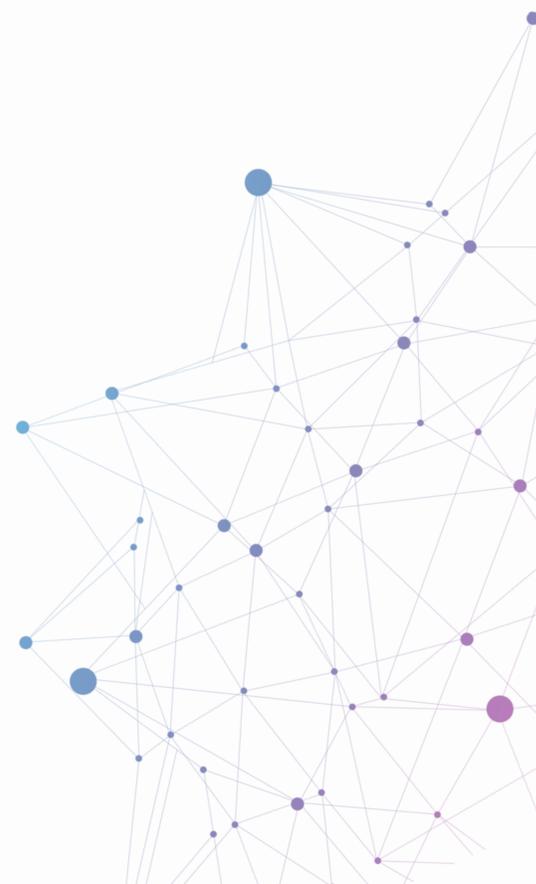
文化交流会

会議の詳細

主催者

参加者

終わりに

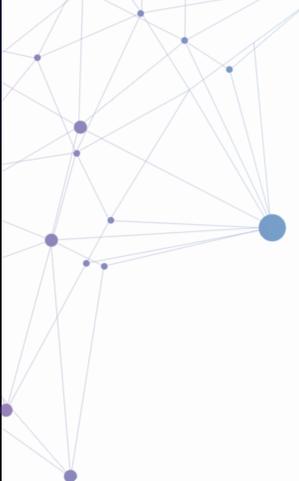


日英学生会議の理念

日英学生会議は、日本と英国の将来の担い手である学生同士の交流と議論の場を提供することで、両国の学生が社会で活躍する際に礎となる人脈形成を支え、日英間の交流を活性化させたいと望んでいます。一期一会の出会いを大切にし、学生時代に築いた絆は、将来に渡る宝です。また、そのような交友関係は、人生や価値観に大きな影響を与える可能性を秘めています。日英学生会議は、日本や英国というそれぞれ内部で完結しがちなコミュニティーを跨ぎ、こうした「出会い」の架け橋としての役割を担っています。

私たちは、異なるバックグラウンドを持つ学生同士が議論することを通じて、潜在意識に眠る自分の先入観や偏見を問い、多角的なアプローチに気づく、という体験を重視しています。この体験は、国境を超えた舞台上で幅広い視野を持って議論できる個人の形成にとって、かけがえのないものです。私たちは自由闊達にとことん語り合うというこの風土を、会議期間・会議場内に終わらせず、是非とも学生各人に自国のコミュニティーに持ち帰ってもらい、こうした「気づき」の体験を日英学生会議の外に伝えていきたいと考えています。私たちは、「自由闊達な議論」→「気づき」→「アウトプット」というプロセスのモデルとして、日英学生会議を位置付けることを志しています。

日英学生会議は、日本と英国における、グローバルな視点を持ち、政治や社会への関心が高い学生が一所に集う、希少な機会を創出します。日本、英国という大国の将来を担う学生たちが、アイデアを共有し、持続的な社会の実現に向けてのビジョンを提言するという営みは、それにより得られる知見や、次世代のリーダー育成において、両国の将来にとって貴重なものです。日英両国の学生という、これまでなかった視点を開拓することは、次世代を見据えた政策や取り組みの構想が芽生える土壌となり得ます。この新たな価値を十分に活かすべく、私たちは学生会議の成果を公表し、フィードバックを通して、社会に還元いたします。私たちは、日英学生会議が、日英間の豊かな交流と議論の源泉となることを願っています。



本年度のテーマ

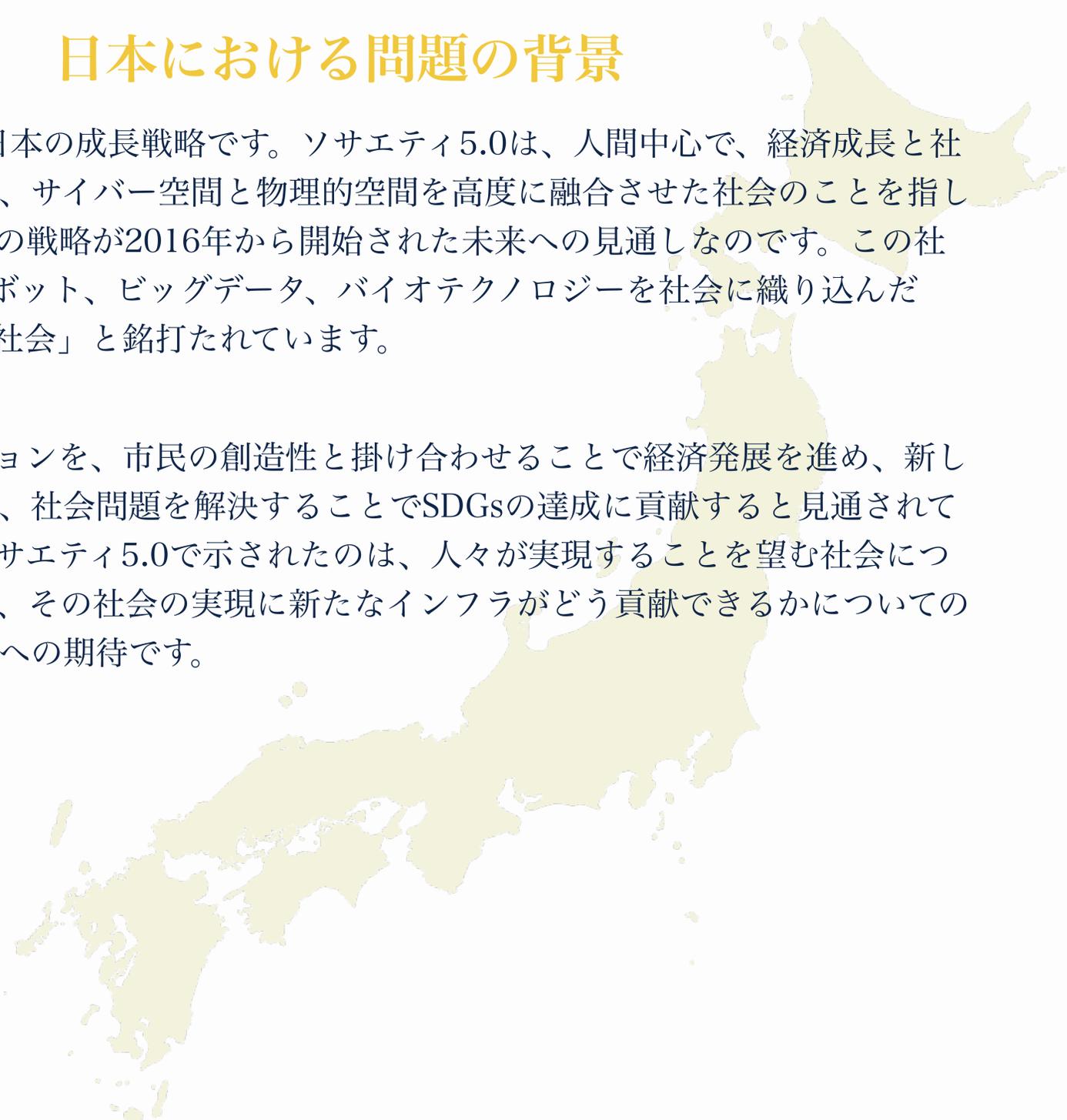
「倫理と科学技術」

科学技術の発展により、現代社会で人と人がつながる一方、私たちの生活にあった様々な制限が取り払われています。特に人工知能、ロボットやビッグデータ分析などで代表したIT産業は、普段の社会生活や仕事場までも私たちの日常生活まで浸透化していきます。このようなテクノロジーイノベーションは、その論理性を考える必要があります。すると、「今までのテクノロジーはどのように社会的や経済的挑戦に耐えていくか」、それについて「どのような政策が人間全体の福祉を改善できるか」、という様々な問題を考えねばなりません。

日本における問題の背景

ソサエティ5.0は、日本の成長戦略です。ソサエティ5.0は、人間中心で、経済成長と社会問題の解決を行う、サイバー空間と物理的空間を高度に融合させた社会のことを指します。日本では、この戦略が2016年から開始された未来への見通しなのです。この社会は、AI、IoT、ロボット、ビッグデータ、バイオテクノロジーを社会に織り込んだ「スーパースマート社会」と銘打たれています。

デジタルイノベーションを、市民の創造性と掛け合わせることで経済発展を進め、新しい価値観を生み出し、社会問題を解決することでSDGsの達成に貢献すると見通されています。全体的にソサエティ5.0で示されたのは、人々が実現することを望む社会についての会話を促進し、その社会の実現に新たなインフラがどう貢献できるかについての対話を推進することへの期待です。



イギリスにおける問題の背景

女王の資産により開設された技術とイノベーションの未来プロジェクトは、2020年代のイギリスの経済成長を支える技術発展を指定しています。このレポートでは、企業に対して、技術発展が著しい製造業やインフラの分野に投資をするよう奨励しています。効率が高く、環境に優しいインフラ作りと、第4次産業革命への順応を奨励しています。第4次産業革命は、AI、マシンラーニング、言語コーディング、ロボティクス、センサー、クラウドコンピューティング、ナノテクノロジー、3Dプリンティング、IoTによって開発と効率化を進めることを言います。

イギリス政府も、イノベーションにより持続可能性目標を達成し、クリーンなエネルギーの開発を促進することを目標にしています。この目標の中には、再生可能エネルギー、炭素貯蓄、水素燃料と原子力の復興が含まれます。イギリスは、発展しているテクノロジーによって、コロナウイルスによる経済のショックと、EU離脱による経済への悪影響を打破し、「よりよい復興」を達成しようとしています。

現状

現在、技術の未来は分岐点にあります。パンデミックは、今までの潮流を加速させ、デジタルインフラの構築を後押しするでしょう。2021年の日英学生会議では、革新的な代替タンパク質の技術の可能性、思想の自由を育てる技術の限界、気候変動への取り組み、サイバー戦争から浮かんでくる倫理的な疑問について批判的に考慮しました。本会議では、未来への技術のメリットと内在する倫理的な問題について考え、現在の法整備を代替する政策を提案します。

イベント

ロンドンイベント

シルビイー・デラクロス教授は、バーミンガム大学で法と倫理の研究をなさっています。教授は、「私たちのデータは、誰のデータなのか？」という、今回のパネルディスカッションの核心をつく質問で議論を始めました。デラクロス教授は、「データの所有」という考えは、人間が持つコントロール欲と、個人情報に対する脆弱性をデータを所有することで乗り越えたいという願いによるものだと指摘します。この脆弱性に対するより生産的な取り組みは、個人がサービスプロバイダーと有利な立場で交渉できるよう、ボトムアップで啓発する方法です。しかし、どのように個人を保護し、啓発するかという議論は欠かせませんが、同時に、デラクロス教授は、コミュニティ単位でデータを管理する発想も熟考の価値があると述べました。

その次に議論をしたのは、エクスター大学でデータ学の主任講師をされているニコロ・テンピニ博士です。博士は、デジタル経済が「監視資本主義」的であることを指摘しました。データが消費行動を予測し、消費者をあらかじめ予測された消費行動をするように促すために使われます。プライバシーを気にする消費者は、中小企業に比べ、フェイスブックやGoogleのような巨大企業を避けることが難しいと。デラクロス教授の議論を取り上げ、市民がより啓発され、広告企業よりも消費者のニーズに合ったインターネットの構築を求めることは重要です。

当時IT法をノッティンガム大学で研究しておられたジャヨン・チェン博士がスピーチをなさいました。チェン博士は、経済趣向的な所有、道徳趣向的な所有の理解の違いについての論点を提示しました。チェン博士はケンブリッジ・アナリティカの例を挙げ、もっとも重要な疑問は、ケンブリッジ・アナリティカが個人情報使

用に有効な同意を個人からとったかということです。チェン博士は、民主主義に対して致命的な影響のあるデータの使用にも個人が同意する権限を与えられるべきかと問いかけた。様々なシナリオでは、個人に全ての権限を与えない、異なるデータ使用のガバナンス体制が必要でありましょう。

活発な議論と、Q&Aの中で、パネリストたちは手それぞれが提示した疑問をさらに深く掘り下げました。特に、アクターたちが対等に情報を管理することができるようにする方法や、ジェンダーや性的嗜好などのセンシティブな情報が誤使用されることを防ぐ方法についても議論がありました。専門知識がなければ、個人情報の使用用途に対してインフォームドコンセントを与えるどころか、使用用途を知ることすら困難です。デラクロス教授が、私人とデータ収集者の間に信頼できる仲介者を置くことを提案しました。データの使用者と所有者の対等性を高めることは、取引におけるデータの流れを変えることになります。この論点について、チェン博士は、インターネットに個人情報が管理されるのではなく、プロバイダー側が個人にアルゴリズムを共有するという個人情報管理システムについてお話しされました。企業が個人情報を管理するアルゴリズムの透明性を確保する上での障害は認識的なものだとテンピニ博士はおっしゃいました。データは、自動化された巨大なシステムの中で収集、拡散されることから、企業自体が個人情報がどう管理されているのか把握していません。終わりに、パネリストの皆さんは、個人情報の取り扱いの望ましい規制枠組みについてお話しされました。

全体的に、今回のイベントは、本会議のテーマの中心となる倫理的な問題について非常に充実した議論となりました。パネリストと観客の皆さんが、本パネルディスカッションで扱われ

た重要な論題について、有益な考え方、発見を得られたことを望みます。

Nicole Doyle

シルビ・デラクロア教授

デラクロア教授は法と倫理の交差性、特にデータと機械の倫理を専門としています。彼女は現在倫理的文脈のために作られたコンピューターシステムのデザインと、データの受給者と供給者の権限の不均衡を解決するための非階層的データ信託の可能性について研究しています。教授は公共政策委員会にて司法制度へのアルゴリズムの導入とデータ信託政策に尽力しました。彼女はAlan Turing InstituteとMozilla Fellowのフェローです。



ジアホン・チェン教授

チェン教授はシェフィールド大学の法学教授、そしてノッティンガム大学Horizon Digital Economy Researchの前IT研究員です。彼の研究分野はデータ保護法、サーバーセキュリティ法、人工知能と法、データ倫理とインターネット規制です。彼はビッグデータとデータ保護法の博士号を、SCRIPTed: A Journal of Law, Technology and Societyの編集長も務めたエジンバラ大学法学院で取得しました。

ニッコロ・テンピニ教授

テンピニ教授はデータ科学と人工知能研究における認識的・組織的・社会学的な問題の交差性に焦点を置いているデータ学の学者です。彼の経歴は学際的です-彼は哲学と情報科学の両方の学位を持ち、これらの要素は彼の研究を通じてみられます。彼はエクセター大学Egenis Centre for the Study of the Life Sciencesのデータ科学の教授で、イギリスのデータ科学と人工知能研究の国立研究所であるAlan Turing InstituteのTuring フェローです。



東京イベント

2021年、日英学生会議は東京大学の学生による情報メディア団体・UT-BASE主催の新歓イベント2種類に参加しました。

これら新入生のためのサークル情報提供のイベントの時期は、新歓の時期と同じくして私たちが募集を4月末から開始することもあり、理想的なものでした。

最初のイベントは5月25日の20:00から行われた国際系のサークルや学生団体に興味を持つ学生を対象としたものでした。このイベントではオープニングトーク、UT-BASEが新歓期間中サイトで公開してくださっている各団体による広報動画、そして学生たちが実行委員に会議に関する質問をすることのできるQ&Aが行われました。

2種類目は1つ目と似ているものの、全ての学生団体とサークルを対象としているものでした。日英学生会議は、4月4日の12:00～12:20と12:40～13:00、11日の12:00～12:20、12:40～13:00、13:20～13:40の複数回説明会を行いました。この説明会では広報動画とQ&Aを行いました。広報動画では、日英学生会議のミッション、新型コロナウイルスへの対応、対面にて広島で開催された2019年の第4回会議、オンラインで行った2020年第5回会議、さらに今年度第6回会議のテーマである「倫理と科学技術」の紹介、そして応募方法について説明しました。Q&Aでは、実行委員が参加者の視点から情報を共有し、興味を持って下さった学生によりよい理解をして頂いたことで、多く

の学生にとって有益な時間を提供することができました。

日英学生会議は、これらのイベントをFacebook、Instagram、そしてTwitterにて日本語で告知することで全ての大学の学生がこのイベントに参加できるように努めました。さらに、私たちのSNSアカウントのフォロワー数は2021年に前年度の約2倍となり、昨年比べてより多くの人々に存在を知っていただくことができました。

全体として、私たちはこれらのイベントにより日英学生会議が国際交流の機会に興味のある日本の学生への学生団体であることを、より広い人々に知ってもらうことに貢献したと考えています。これらのイベントを通して今年は日本から多くの応募を頂くことができたということで、日本の大学生間における知名度のある学生団体になるために、私たちは2022年にはより広い多くの日本の大学で活動することを計画しています。

Mizuho Ina



プログラム構成

日英学生会議は、異なるバックグラウンドを持つ両国の大学生または大学院生が多角的なアプローチから意見やアイデアを共有し、幅広い視野を持って思考力を高めることを目的としています。この過程で自由闊達な議論は極めて重要です。そのため、我々は、参加者全員が積極的に議論に参加し、セミナーやワークショップ等を通して得た学びを発信できる環境づくりに努めました。



事前学習セミナー

参加者全員が倫理と科学技術の現状に対する一定の理解力、積極的に議論に参加する力、論理的に物事を考える力、そして自分の意見を構成する力を育むことを目的としています。本会議前に合計1回の事前学習会を実施しました。



セミナー

学術的な視点からインプットを行うことがセミナーの目的です。セミナーで得た知識や見解は他のアクティビティでも基礎知識として非常に生かされ、現状に対するより現実的な対策を考える上でも参考になります。参加者によるディスカッションやプレゼンテーションの構成要素として機能する重要な場を提供します。各セミナーの後は質疑応答の時間を設け、対話形式で行いました。



文化交流

日英学生会議は、参加者が長期的な関係を築くのに役立つ相互理解によって、学術的経験をサポートします。文化交流では、お互いの背景を学ぶ上で非常に重要な役割を果たします。ここでは、倫理と科学技術の文化的に異なる描写と活動の認識の探求を主に行いました。





プレゼンテーション

プレゼンテーションは、本会議での学びのアウトプットを試み、会議を締めくくります。セミナーやワークショップで形成された見解や意見を発言し、問題提をし、その問題に対する実行可能な解決策を提案します。



ワークショップ

参加者がグループでの調査とデータ分析に積極的に貢献する相互交流的なセッションです。ワークショップでは、参加者と講演者の間でディスカッションをする機会が度々あります。ディスカッションでは、学びから得た情報交換や新しい見解の共有をするために協議するといった意味合いがあります。学生らしい機転の効いたアイデアが多いため、自らの考えを発展させ、新たな視点から考える手立てとなります。



政策立案

政策立案は現在の倫理と科学技術の政策を分析し、その結果として新しい政策を専門家以外にもわかりやすく提案するアクティビティです。政策立案では4つの項目（現状と問題、解決策の機能性と必要性、適応性、まとめ）に分けて行います。参加者各自は会議を通しての学びを深め、主要な論点と解決法を引き出すことに挑戦します。



スケジュール

AUG 18

AUG 19

AUG 20

AUG 23

AUG 24

AUG 25

AUG 26

9am BST - 5pm JST

Mr Zak Weston Good Food Systems	Mr Aaron Gertler Effective Altruism	Dr Shahrar Ali Climate Change	Dr Andy Miah Social Media & the Olympics	Dr Emmanouil Tranos Technology & Urban Design	Dr Elisabetta Versace AI & Animal Research	UK-JP Group Discussion
---	---	---	--	---	--	----------------------------------

Break

11am BST - 7pm JST

Mr Rob Black Cybersecurity & Deception	UK-JP Podcast: User Not Found	UK-JP Group Policy-making	UK-JP Film Screening: Life in a Day	UK-JP Group Policy-making	Ms. Jodie Ginsberg Online Censorship	UK-JP Group Presentations
--	---	-------------------------------------	---	-------------------------------------	--	-------------------------------------

スポンサー・協力

多難な年であったにも関わらず、日英学生会議を実現するためにご協力いただいた以下の団体の皆様に感謝申し上げます。そして、長年弊団体を支援くださっているRoute Hの尾澤章浩様、そしてGlobal Learning Centerの辻村慎乃介さまに心から感謝いたします。



Route H



Sojitz Foundation



Benesse



GLOBAL
LEARNING
CENTER

JAPAN FOUNDATION



国際交流基金

事前学習

参加者が倫理と科学技術というテーマに初めて触れることになる点で、参加者の学びにとって事前学習会はとても重要なものです。セッションはZoomを通じて、意見の可視化を助けるGoogle Jamboardも用いながら行われました。事前学習会は参加者が初めてお互いに会い、意見を交換する機会にもなるため、参加者同士の交流の面でも大きな役割を果たします。夏の会議での議論を促進させる、参加者同士の絆をここで築くことができます。

事前学習会は科学技術の発達の歴史的な背景と現在の重要性についての議論から始まりました。人間社会における新興技術の影響を捉えた第四次産業革命の概念について分析しました。核となる主張は、一定の歴史的場面にて進歩が過去との訣別をもたらす革命的な影響を社会規範や政治関係、経済成長にもたらしているということです。この言葉はブロックチェーンや神経技術、ゲノム編集や人工知能が世界を変える可能性に注目しており、どのように私たちがその変化を具現化することができるのかを問うています。参加者とともに、私たちはもしそのような過去との訣別をもたらす革命的变化を信じるか、第三次と第四次産業革命の違いは誇張されているものであるかについて議論を行いました。そして、より公平で繁栄した未来がどのような者であるか、そして新興技術がその目標を達成することができるのかについて考えました。

議論はその後、技術革新から起こる危険性について熟考する上で実践的な話題へと移りました。私たちは拡散されたデータ-人権や正義、正当性の管理を行うシステムについて意見を交わしました。技術の進歩の悪の面には、例えば政治的意見の抑圧や司法制度の中の偏見の強化、自動化による労働権の縮小など、大

量の大きな倫理的影響があります。私たちはその中でもどの不安が新型コロナウイルス感染症の影響で現れてきたかを考えました。陽性者の追跡用アプリや隔離の監視、ワクチンの開発、そしてSNS上での情報拡散のされ方などは、パンデミックへの対応に科学技術が持つ重要性を示しています。その後、単純な技術解決論から市民社会と科学技術を制御する政策の大切さに議論は移りました。そしてこのセッションはパンデミックの教訓とそれがどのような未来のデジタル社会の先駆けているのかについて熟考して幕を閉じました。

事前学習会・課題図書

Bucher, T. (2012). Want to be on the top? Algorithmic power and the threat of invisibility on Facebook. *New media & society*, 14(7), 1164-1180.

Cinelli, M. et al. (2020). The COVID-19 social media infodemic. *Scientific Reports*, 10(1), 1-10.

Land, M. K. & Aronson, J. D. (2020). Human Rights and Technology: New Challenges for Justice and Accountability. *Annual Review of Law and Social Science*, 16, 223-240.

Thomas, P. & Nicholas, D. (2018). The Fourth Industrial Revolution: Shaping New Era. *Journal of International Affairs*, 72(1), 17-22.





ザック ウェストン氏

グッド・フード・インスティテュー
トのマネージャー

ザックウェストン氏は、肉、卵、乳製品の代替品を開発することにより、健康で、ちょうどよく、持続可能な食システムを構築することを目的とした国際的な非営利団体グッドフードインスティテュートで働いています。彼は、生産者やサプライヤー、より上位の会社と協力し、イノベーション、インフラ投資の拡大によって代替タンパク質を普及させることに努めています。効果的利他主義を支持するザック氏は、ビジネスの学士号を持ち、現在の職場にはスタートアップで数年の経験を得た後に働き始めました。

ウェストン氏は、どう優れた食糧システムを生み出すか、特に「代替タンパク質」に焦点を当てて話してくださいました。世界的にみて、3.5億メートルトンもの肉が1日に生産されていますが、肉の消費量はさらに増加すると言われていきます。それと同時に、肉の消費について一度考え直す必要があります。まず、動物はとても非効率なバイオプロセッサーであり、カロリー・エネルギーがたくさんの動物を渡ってから人間へとたどり着くということは、87~97%もの食料廃棄へと繋がります。また、産業的な動物の取扱いは環境破壊や、世界的な食糧不足、次の世界的パンデミック、動物たちの苦しみなどといった、たくさんの問題を引き起こします。

これらの課題に対して、私たちは、「どのようにして、2050年までに、100億人もの人々に食糧を行き渡らせることができるか」という問いを投げかけなければなりません。全ての人にとって持続可能であり、かつ必要な栄養素を満たす方法として、ウェストン氏が働く、The Good Food Instituteは、代替タンパク質の市場占有率を上げることに力を入れています。代替タンパク質は、3つのカテゴリーに分けられます。プラントベース（植物を原料とするもの）、発酵（微生物や菌を使うもの）、栽培品種（動物の細胞からるもの）です。

代替タンパク質は、従来の肉に比べて、地球温暖化や気候変動への影響が極めて少ないことに加え、消費者市場がベジタリアンやビーガンだけではなくなくなったことで、より注目を集めています。たくさんの方が、「フレキシタリアン」（ゆるベジタリアンとも言われる）になり、肉の消費を減らすことに関心を持ち始めています。従って、代替タンパク質は、ベジタリアンやビーガンだけではなく、雑食の人やフレキシタリアンも対象としており、ビジネスをより持続可能にすることで、市場の拡大や急成長へ繋がっています。あるひとつの食生活から違うものへと完全に移行するというのではなく、少しでもプラントベースの食品を取り入れることこそが、私たちが取れる最初の一步です。

代替タンパク質の製造は、色々と便利なことがあります。一つ目に、完全的なカスタマイズ性と操作がより可能になることが挙げられます。賞味期限や食品の安全性を改善するだけでなく、食べ物の栄養素を増加させることができ、何千万人もの発展途上国で暮らしていたり、経済的に困っていたりする人々を助けることになるでしょう。二つ目に、皆が欲しがる高級部位のみを作ることも可能です。一匹の動物をその部位だけのために育てるということもなくなり、食糧廃棄や動物の残酷な扱いも減ります。それに加え、製造工程はより簡単に素早くなり、効率化の面でいえば、日本のような高齢化社会にも適しているといえます。

最後に、参加者からいくつもの面白い質問がウェストン氏に投げかけられ、とても活発的なQ&Aセッションを行うことができました。文化的や宗教的な理由から代替タンパク質の受け入れを拒む人々はあるのではないかとという質問がありました。ウェストン氏は、この産業はまだ初期段階にあり、これからは、一人一人の必要性や嗜好に合わせた、よりたくさんの種類の製品を開発することになると説明しました。また、開発における、障壁や邪魔をするものとして、値段や規制当局の承認を挙げました。しかし、これらは、時間の経過や代替タンパク質への注目度を上げることで解決できると考えています。代替タンパク質はすでに、とても魅力的であり、この分野におけるテクノロジーの発展はより加速することが予測されているので、製造にかかるコストは下がるでしょうとウェスタン氏はコメントしました。

家畜からの排出物は、世界的にみて、気候変動の主な原因の一つとされているのにも関わらず、代替タンパク質を気候変動の解決策とする案への資金は十分に集まっていません。こんなにも素晴らしい可能性があるテクノロジーであり食べ物でもある、代替タンパク質への資金の配分が、なぜ不十分なのか不思議です。近い未来で、これらを「代替」肉と呼ばず、ただ肉の一種として捉える時が来るだろうと私は思います。

Mai Sugimoto



ロブ ブラック氏

責任者

イギリスサイバーディセプションラボ



ロブブラック氏は、国立サイバーディセプションラボの責任者で、クランフィールド大学でサイバーセキュリティの修士課程で情報活動について教鞭をとっていらっしゃいます。また、ブラック氏は、アートファイアという、行動変容についてのアドバイスを行う会社でも勤務しており、サイバー防衛、セキュリティの機関に対する研修や、計算補助を行っておられます。また、イギリスの9・12サイバー戦略チャレンジの責任者でもあります。

まず、本会議の参加者は軍隊も以前見たことのあるプレゼンテーションに参加しました。

英国サイバーデセプション室 (UK's National Cyber Deception Laboratory) のロバート・ブラック氏はサイバーセキュリティーと倫理的意味についてのレクチャーの中で心理学の重要性について話しました。ブラック氏はサイバー世界において地政的な力は、今や地理的な位置と軍施策に制限されるものではなく、オンラインにも浸透していると訴え、「今までの基本的な時空や物理の原則はもはや使えない」とサイバーの世界に生きる重要性を明らかにしました。サイバー世界では、規範はなく、倫理的な境界線も明確に定義されていません。前例のないものから自分たちを守るために政策や倫理的骨組みを新ためて考える必要があります。

サイバー防御の標準的なモデルは昔ながらの「要塞」的な手法で、ネットワークに壁を作りサイバー攻撃を防ぐやり方です。この方法ではサイバーアタッカーは排除され、最悪の場合裁判沙汰になることを想定しています。しかしどちらの場合も厳しい監査があるわけではありません。セキュリティー侵害はよくあることで、その規模と重大性は非常に大きなものとなりえます。2020年には、SolarWinds社とMicrosoft社が顧客に送付したソフトウェアアップデートに攻撃者が悪意のあるコードを混入させ、システムに侵入して8ヶ月以上も検知を逃れました。米国では、ペンタゴン、財務省、国立保健研究機構、国家核安全保障庁、および数千の民間企業で侵入が確認されました。ハッカーの身元は特定されていません。米国と英国はロシアの安全力を非難しましたが、何か対応ができる法律はまだありません。この受動的な「要塞」方式では、サイバー侵入が検知された後にしか対応できないのです。ハッカーが発見されるまで、ネットワーク内で平均70日を費やしている状況ですが、これで十分なのでしょうか。または、今のシステムが既に危ういものと考え、政策を変えてハッキングが起こる前に行動するべきでしょうか。

ブラック氏は今の状況ではサイバーデセプションへの移行が必要であると主張しました。要塞の壁が破られるのが避けられないのであれば、その中にあるデータを有用性の低いものとするべきです。

例えば、偽りの情報を記載した文書を正規の文書と一緒に意図的に仕込んだり、実在するように見えて実在しないシステムの弱点を作るのです。そうすれば攻撃者の立場からすると、ネットワークに侵入することが確実な成功ではなく、不確実な過程となります。ハッカーが抽出する情報は信用できるのでしょうか？それとも罠でしょうか？偽の手がかりに惑わされているのでしょうか？彼ら自身の存在を検知するネットワークに入ってしまったのでしょうか？抑止策としての騙しは人間の性質の複雑さを理解してできるものです。心理学側面を用い、混乱を招くことで、ハッカーが状況を理解することを困難にします。

侵入されることを見越した準備からさらに一步すすんだのは、倫理的に判断して対応することです。英国政府の方針では、ハックバック（サイバー報復）を認めていません。また、外国のシステムに転送されると攻撃者の身元が明らかになったり、外国のネットワークに損害を与えたりするような、自国のネットワーク内のファイルを侵害することも禁じています。多くの決定権は民間出身の技術者に委ねられていますが、ブラック氏は、国軍が攻撃を受けたときに反撃できるように政策を変更すべきだと考えています。ブラック氏は、国益のために複雑な判断を下すのに必要な訓練を受けているのは軍隊だけだと主張しています。従来の戦争と同様に、攻められた時に対応することが道徳的な義務となれば、デジタル領域の境界線、そして市民のデータを国家の義務として保護することができます。報復の脅威とそれを実行する意思があれば、逆説的に紛争を防ぐことができ、悪質な介入を防ぐために必要なリスクと措置をとっていくことになるのです。一方、積極的なパラダイムへの移行は、サイバー軍拡競争を招き、すべての国をより危険な状態に置くことになりかねないという反論もあります。今私たちがいる新しい状況において、倫理的な意味合いについてオープンに議論し、積極的に関わっていく必要があるという視点を与えてくださったブラック氏に感謝します。

Madalina Benderschi



アーロン ガートナー氏

コンテンツ担当者
効果的利他主義センター

アーロンガートナー氏は、効果的利他的センターで勤務しており、効果的利他主義についてのフォーラムや、ニュースレターの執筆など、多様なコンテンツ作成をなさっています。ガートナー氏は、イェール大学で史上初の大学を拠点とした効果的利他主義グループを創始した2014年から効果的利他主義に関わって来られました。効果的利他主義センターに関わられる前は、フリーランスとして効果的利他主義の普及に努めるとともに、ソフトウェアの会社で勤務してこられました。ガートナー氏は、イェール大学で認知科学の学士号を取得される際、チャリティと寄付者が同コミュニケーションをとれるかについての論文を執筆されました。

ガートラー氏の「人々は彼らに直接影響を及ぼす問題のみに焦点を当てる傾向がある」という言葉からこの講義は始まりました。数えきれないほどの差し迫った課題や問題に溢れた今日の社会において、私たちはたくさんある問題の中から、どれを選べば良いのかという難しい状態に直面しています。より良い優先順位をつけるために、ガートラー氏は、「世界主義」と、「原因を基にする優先順位づけ」という2つの要点を紹介してくださいました。「世界主義」とは、自国の国民だからより近くに感じるという偏見に囚われず、他国の人々を平等に扱うということを目指し、「原因を基にする優先順位づけ」を、その問題の目新しさや認知度で判断するのではなく、それがもたらす影響力に着目するということです。

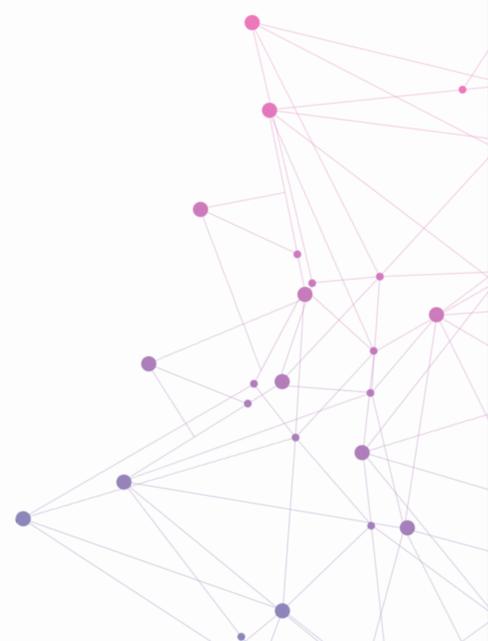
これらは、「効果的利他主義」と呼ばれる概念の要点であり、ガートラー氏の講義の主な焦点でもありました。それは、証拠や理由となるものを元に、あなたができる限りのことをやるということです。私たちが住む世界は、明らかにとても複雑であり、私たちは学び、磨きを続ける必要があります。たとえ自身が間違っていることを証明するとしても、私たちは最善の証拠を探すことを求めて努力をする必要があります。

ガートラー氏は、その後、職業の選択こそが、私たちの人生で最も道徳的な選択であると言いました。なぜなら、個人としてどの問題に取り掛かるのかを考えることが、世界に大きな変化をもたらすことに繋がるからです。どの問題に取り組むかを決める際に、ガートラー氏は、スリーファクターモデル（三つの因子からなるモデル）を駆使すべきだと言いました。これは、スケール、ソーバビリティ（解決可能性）、ネグレッティドネス（無視されている状態）の三つを指します。スケールとはどれくらい問題が大きいか、ソーバビリティとは私たちの可能性、ネグレッティドネスとは現在の状態でどれくらいのことになされているかを言います。このモデルを適用することで、どの問題が優先順位のリストの一番上に位置するのか、客観的に決意することができます。しかし、これらの

因子は変化しやすく、感情的、文化的や宗教に関わる側面が含まれるときに主観的になりやすいです。よって、これらを数値化することは容易ではありません。そうは言っても、「効果的利他主義」が最終的な解決策とはならないとしても、確かに実用的で効果的であり、社会においての影響力を最大化するために持つべき概念です。

最後に、ガートラー氏は、バイオセキュリティと造られたパンデミックのことについて話しました。テクノロジーの発展は、将来的に、多くの造られたパンデミックが生じることに繋がる可能性があります。これらは、自然的に生じるものより遥かに悲惨で壊滅的であります。それに加え、スーパーインタリジェントAIがもたらすリスクも無視できません。AIは、非同盟（私たちと共通の目標をもたない）であり、兵器化される可能性があることに加え、不確定要素や疑念に溢れています。本質的に、私たちよりも賢いものの能力や動機を理解することは難しく、危険です。これらの問題を解決するためには、まず、これらのことに対しての人々関心を集める必要があります。そして、政府や大きな企業は素早く動き、たくさんの人に影響をもたらすような、より有能なシステムを開発しようという強い動機があり、資金が最も緊急的な課題に割り当てられるように、認知度を効率的に広める必要があります。これらは大規模すぎるように聞こえますが、学生としては、明るい未来を構築するために、影響力のある職業を見つけることから始められるかもしれません。

Mai Sugimoto



USER NOT FOUND

ビデオポッドキャスト
Dante or Die

2日目のセッション2では英国の制作会社 Dante or Die作成のビデオポッドキャスト「USER NOT FOUND」を観ました。このポッドキャストは、写真や投稿でいっぱいのアカウントを遺して亡くなった人のデータをどうすべきか問いたものです。ナレーターは、ある日突然亡くなった元恋人のデジタル遺産の遺言執行者になってしまい、データをどうするのか責任を全て負わされてしまいました。この時元恋人とは半年以上前に別れていて、全く連絡もとっていませんでした。こうした別々の状態にも関わらずデータ責任を負わされることがあると知り、ナレーター、そして観ている私たちも最終的なデータの取扱い方を誰に任せるべきか考えさせられました。ナレーターは多くの時間をかけて選択肢を考えましたが、オンラインにアーカイブしてプロフィールをアクセスできるよう遺しておくか、全てを完全に消してしまうかの二択しかありませんでした。

この作品は、個人としてソーシャルメディアをどのように使用し、オンラインで他人とどう交流するかを反映しています。特にこれらの「ソーシャル」プラットフォームは情報やコミュニケーションは共有されるようデザインされているものの、実際はユーザーがひとりになるための場所であると示唆されています。最終的にナレーターは、SNSがオフラインの世界から切り離された世界で、一見自分たちの生活を表しているようで決して本当には体現できないものだ、と捉える事で最終的な決断を下しました。オンラインに残っている元恋人は、ナレーターと親しかった頃の人とは別のものであるとし、全てを削除することに決めたのです。

その後のディスカッションでは自身のデジタル遺産の扱われ方について議論しました。そして現在SNSではほとんど選択肢がないことに気づきました。私たちの多くは、今回初めてデジタル遺産について知り、より深く考えるきっかけとなりました。この問題が一般的

に気付かれていないのは、ソーシャルメディアがまだ新しいものであることが原因ではないかと仮定しました。しかし時間が経つにつれ、使われないアカウントが増えていき、死後のデータをどう維持するかはより緊急の問題となるでしょう。議論が進む中で、以下のような質問も浮かびました。死後のデジタルデータに関して意識することでオンラインでの投稿の仕方も変わるとしたら、私たちはもっと考えて投稿するようになるのか、それとも態度は変わらないか、というものです。おそらく、こうした気づきにより一部のユーザーは共有する内容をより選択するようになる一方で、全く気にしない人もいると思います。このポッドキャストでも言及されていたように、こうした意見や態度の違いがデジタル遺産でのより幅広いオプションの必要性を浮き彫りにしています。

Angel Rose





シャハラ アリ博士

緑の党の警察、国内の治安についての
スポークスパーソン



シャハラアリ博士は、緑の党のスポークスパーソンで、2016年までBMEとしてイギリスの議会政党初のB責任者を務められた方です。シャハラ氏は、生物化学エンジニアと、哲学者の二つの顔をお持ちです。シャハラ氏の博士号は、市民生活における嘘と欺瞞の道徳性についてアプローチしました。シャハラ博士は、欧州連合のアセスメントを行う部署で科学技術の研究者として働き、環境政治についての2冊の本を執筆なさいました。シャハラ氏は、論理的な議論を支持され、メディアやテッドトーク、ロイヤルアカデミーオブアーツ、ブルームスバリーフェスティバルなどのパブリックスピーキングなどにも度々ご登壇なさっています。

3日目には、シャハラ・アリ博士をお迎えし、気候変動を取り巻く議論と、テクノロジーの目的についてのアリ博士のお考えをお話しいただきました。緑の党のスポークスマンでもあるアリ博士は、気候変動の領域での豊富な経験をお持ちです。その経験をもとに、社会で起こっている環境的及び技術的な対立についてのユニークな見方を参加者へ届けてくださいました。アリ博士は、現在の気候変動への取り組み自体が人間中心的であることを批判し、効果的に変化を起こすための包括的なアプローチを開拓するため行われている試みについてもお話しくささいました。

アリ博士は気候変動についての議論への人々の参加を推進する上での事実の重要性についても話し下さいました。それと同時に、事実が持つ議論の推進力についての疑問を提起されたことが印象的でした。特に国内、国際政治では、科学技術の発展によって明らかにされた事実や、研究を大衆を動かす原動力として頼ってはならないという議論が持ち上がっています。この問題は、気候変動について効果的にコミュニケーションを行うために最良の方法は何かと考えさせられました。アリ博士は、気候変動を人類にとって致命的な問題と捉えることが気候変動によってもたらされる悪影響に地球規模で効果的に取り組むための先見的で、決定的な方法だとおっしゃいました。事実の強さのみでは頼りないですが、地球規模へ視点を広げることで、より多くの人々が気候変動への対策を講じるように説得できるだけの勢いと力を持つようになります。特にこのような考え方は、会議全体のテーマにも通じるものがあります。なぜなら、現在の技術が誉められるべき点の一つとして、この地球全体を繋げられることが挙げられるからです。この点で、地球規模の問題は地球全体が一丸となって解決に取り組む必要があるのです。

議論を進める中で、社会の中での技術の役割について、アリ博士は疑問を呈されました。

パフォーマンスと生産性を求められる社会では、新しい技術は既存の商品がより効率的に、より速くタスクをこなせるようにするための手段に過ぎないものです。私たち人間は時間を削減することにこだわっていますが、何のためでしょうか？社会はもしかすると、速さという、技術の間違った要素のみを優先させているのかもしれませんが。技術の速さ以外の側面に着目することで、新しく、興味深い発展が見られる可能性があります。技術の目的と社会的地位についての議論の中で、ステータスの象徴として人々が消費している携帯電話やコンピュータの生産は、倫理的に技術が使われることへの進歩を阻害しているとアリ博士は指摘しました。このような生産の技術は、見た目のみに基づいて評価されています。しかし、気候変動の問題に取り組む上では、地球を破壊するような技術の使用が美化されていることは大きな足枷となります。

Angel Rose





アンディ ミア教授

生物倫理学者、アカデミック、
ジャーナリスト
サーフォード大学

アンディ・ミア氏は、マンチェスターにあるサーフォード大学の科学的コミュニケーションと未来のメディア構築部門の責任者をなさっています。研究は、AIや遺伝子編集などの科学発展がもたらす哲学的な示唆に重点を置いています。10冊もの本を執筆なさり、人類の未来についての権威と称えられています。主なメディア活動には、BBCニュースナイトの出演、BBCニュース24ヴォーグやガーディアンなど、300以上のニュース執筆が含まれます。

アンディ・ミア教授は、技術の歴史的的重要性にも言及しつつ、技術発展の哲学的な見方について焦点を当てたプレゼンテーションをなさいました。最初に、ミア博士は、現在は「技術」の定義がデジタルやロボット工学、AIのみに制限されがちですが、実は人間の歴史が常に技術と共にあったことをお話しされました。現代に定義される「技術」は、近年の発展に伴って人々を圧倒しています。私は、技術が新しい脅威を作り出すものというよりも、人間の探究と想像の欲に伴って自然に発展していくものだと考えていました。ミア教授は、人間が先天的にもつ技術との関係を強調されました。この関係は、現代社会の技術のあり方と通じるものがあり、政治システムの中に織り込んで考える必要があります。もし、技術発展が人間の発展の一部であるなら、技術は人間の影響を必ず受けるでしょう。どれだけ、人間が技術の恩恵を社会に波及させようと試みても、技術は人間からの影響や偏見から自由ではられないのです。

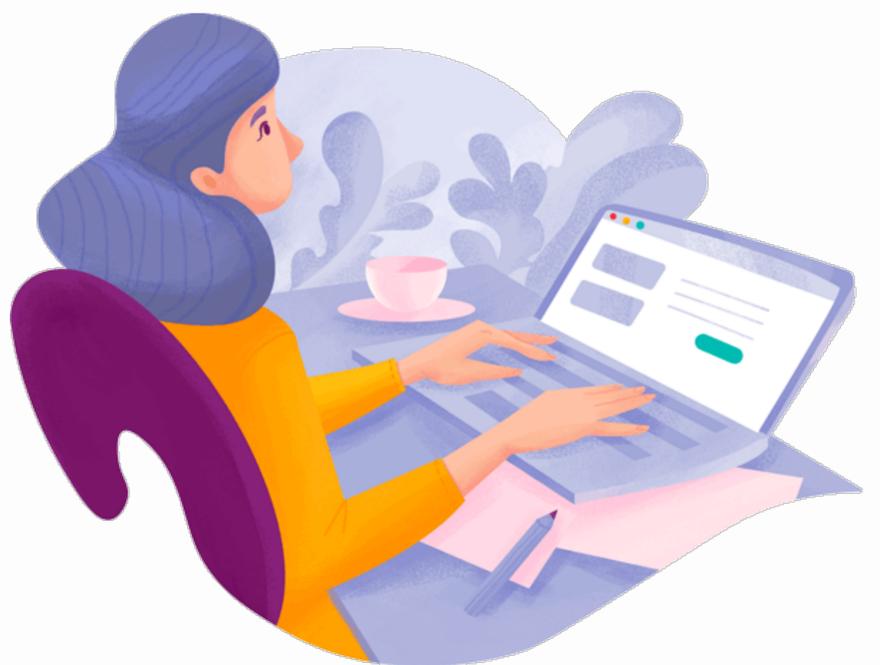
しかし、人間の歴史だけではなく、自然も技術と深く繋がっています。ミア教授は、技術に関する倫理的な決断をする際には、必ず自然を考慮することを提案しました。人間のニーズだけではなく、技術が不可避免的に攪乱する、地球の他の面にも目を向けるべきです。自然と技術の関係はどうなっているのでしょうか？特に自然環境を技術によって再現することは、可能でしょうか？この問いの答えを考えると、ミア教授は今なお続くナノテクノロジーの発展に目を向けました。ミア教授は、技術が小さくなればなるほど、自然の模倣に近くなる、という考えを提示されました。この考え方からは、人間が技術発展を自然なものだと考えるのと同じ様に、技術を自然の一部として見るべきかという議論が起きました。

唯物論的な社会で技術が果たす役割についての議論に立ちかえり、ミア教授は、データおよびデータを取り巻く技術の倫理と所有権の問題を提示されました。例えば、義肢の技術は、人々の自立にとって不可欠なものですが、この技術は誰のものなのか、という問題があります。義肢を使用する人は、確かに恩恵を享受します。

しかし、本当に技術を所有しているのは私たちだと義肢の製造者が主張し、義肢を必要とする人々が製造者の慈悲に頼るしか無くなる可能性があります。

この様な例からは、ソーシャルメディアにおけるデータの所有権をめぐる問題と並行し、どの様に技術が使われるかについて技術を使う側が意見することができないという問題を見ることができます。講演内でミア教授は、人々は技術の使い手、メンテナンス者、開発者としての役割はいつも存在し、簡単に消せるものではないと強調しました。人間が技術に囲まれて生活をしていても、技術には必ず人間的な側面が存在しています。

Angel Rose





エマニユエル トラノス教授

計量人間地理学教授
ブリストル大学



トラノス・エマニユエル博士はデジタル経済の空間性を中心に研究する経済地理学者です。インターネットインフラストラクチャーの地理性について、彼が発表した研究はデジタル世界が地域への経済的影響、また都市の空間性とそれに関する複雑なネットワークなどがあります。また、トラノス氏はビッグデータの新しい情報源の取得で経済と空間的分析をする専門家です。特に、電話事業などの産業からビッグデータを集め、様々な都市とそのシステムの複雑性を解明することに取り組んでいます。

コンファレンスの5日目の前半はブリストル大学からのDr. Emmanouil Tranosを誘い、インターネットのデジタル活動について講義をしていただきました。講義内容は、コマーシャルネットサイト（商用ネット）のハイパーリンクを利用し英国地域別の貿易パターンの分析と推定のことについてでした。このような地域貿易の活動を理解することで、地域間の経済的違いがつかめ、より具体的な地方発展政策も制作できると考えられます。

トラノス教授は、ネット上のデジタル痕跡を使った分析モデルを立ち上げ、特にハイパーリンクと商用サイトとの関係性を明らかにすることができました。しかし、このようなハイパーリンクのデータ出所が主にインターネットアーカイブから取り上げられるのにもかかわらず、ネットではこのような保存機能が完善していることが知らなかった学生たちは何人もいました。そこで、トラノス教授はアーカイブ機能を説明してくださって、少しでも我々がこの機能を触れてみるができるようにしてくださいました。次に、トラノス教授の分析モデルの立ち上げについても、多少専門的な名称と述語が多かったのですが、教授から丁寧に説明していただけるため興味深いものとなりました。

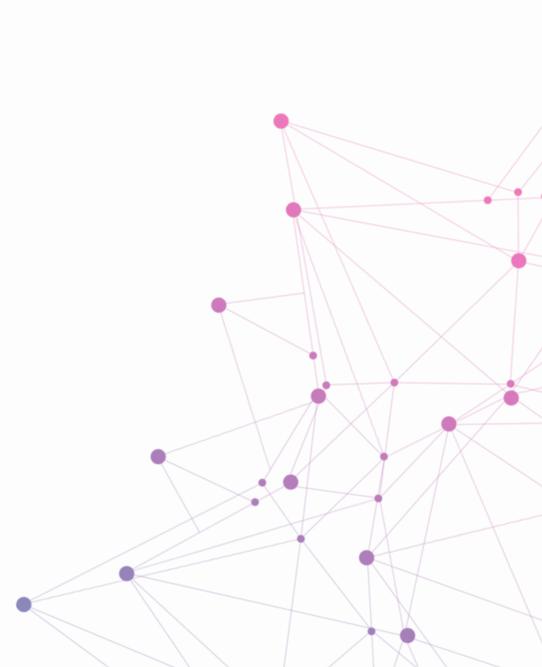
分析の結果、モデルで分析した数値は実際のネット活動のトレスに大体一致することができた上、 $t+2$ までの将来活動の推定もかなり高い精度を持っていました。インターネットのデータを用いただけでそこまでイギリス地方のビジネスや貿易活動の推定もできるだけではなく、将来のデータの中のばらつきも見つけやすくなるでしょう。また、ネット利用者数が増えるほど、コマーシャルサイトの利用も増え、したがってこのモデルが地域貿易活動の分析精度もさらに増えていくことがわかりました。

最後のディスカッションセッションでは、このようなモデルは現在のパンダミック社会に分析できるかどうかという質問がありました。残念ながら、新型コロナウイルスの拡大以来、世界中のビジネスとデジタル行為もかなり影響を受けて変わっているため、このモデルを用いて分

析できない可能性があることと教授がおっしゃっていました。しかし、このようなデジタルトレスの様々な潜在的利用できる可能性があり、それを用いてまだまだ色々な人類行為も分析していけることが、我々はこの授業を通じてわかり、実に興味深い授業でした。

今年度の会議テーマが「倫理と科学技術」についてであるからこそ、我々はこのようなオープンソースデータベースや、インターネットと様々なデジタル化した社会がこれから倫理性について考える必要があると心から感じました。しかし現状として、一般民衆は日常のテクノロジーに関してほぼ全員が深く考えずに使用していることが心配になってきました。トラノス教授は、もしICTやテクノロジーについての教育制度が進めれば、その中にプライバシーなどのような倫理的課題への関心度も増えていくだろうと考えました。また、テクノロジーというものは、決して厄介なものではなく、むしろ上手く利用すれば人類の社会をさらに進歩させる重要な道具になるからこそ、デジタルやICTの教育の普及が進むほど、トラノス教授のような面白い研究もさらに増えてくるでしょう。

Yee Hang Chong



LIFE IN A DAY

映画

Tegan Bukowski, Loressa Clisby,
Kevin Macdonald

数日間の講義を受けて後半のセッションは少し気分転換として参加者全員がコンファレンスの選択した映画を鑑賞することになりました。この映画は、「LIFE IN A DAY 地球上のある一日の物語」という、リドリー・スコットとトニー・スコットが共同製作し、2010年にYOUTUBEで公開したドキュメンタリー映画です。2010年7月24日という1日を、世界中の人々から撮られた素材で、2010年以降将来の世代に見せる趣旨で、作成したのです。

今年はオンライン開催とはいえ、全員が映画を楽しめるために先にYOUTUBEのURLに入り、「三、二、一、レッツゴー！」と、一緒にカウントダウンをしてから同時に入ることができました。また映画の中でも、私や他の参加者たちは、ZOOMのチャットボックスや絵文字などの活用で、映画のシーンについてアクションをしていました。コロナで人と人の繋がりが少なくなったものの、人と人のリアルタイム交流ができ、繋がりが作られたため、テクノロジーはほんとに素敵だと何度も感じました。

映画は、世界中から様々なキャンディットショットと実際の人々の映像が映られ、最初から最後までとても美しかったです。また、映画では「ポケットの中に何がありますか?」、「愛しているものは何ですか?」、「恐れているものは何ですか?」という、主に3つの質問について録画を提供した人々に回答してもらっていました。全員とも素直なりアクションで回答した上で様々な答えができました。例えば第一問に関して、ある人はIPODを自分の命ほど大切にしておいてポケットに入れた；ある人は自分を守るため銃をポケットにしまっておいた；ある人はポケットの中に何もなかったためそれを変えたく努力をしていた…などです。

また、映画の中も色々な醜い現実も見せてくれました。あるときは、まだ生きて牛を銃殺したというシーンがありました。あるときは、人が恋に落ち、その気持ちを伝えたものの、上手くいかないことがありました。あるときは、末期疾患であった人が少しずつ命なくなっていました。

た。あるとき、人と人との紛争が止められず、様々な崩壊と絶望のシーンもありました。

このような暗いシーンに対して、映画の中で出てきた愛情と光がさらにコントラストされていました。あるシーンでは、人々が自分の持っているものに喜んでいました。それは、バッジでも、妊娠中の検査証明でも、愛している、愛されている人でもありました。我々は、この映画を通じて、今までの自分自身について考えることもできました。日本では感染者数の急増が起きている中、オンライン会議に参加し、そして盛り上がったことはまさに幸運で他にならないと思います。

そして、ディスカッションセッションで、映画のテーマについて各自の意見を述べてもらいました。全員、この映画は愛と相対性についてというテーマに同意していました。映画において、ある人にとって最高の1日といっても他人には最悪な1日であるという場面が、何度もあったからです。しかし、それでも我々は自分を愛し、毎日を最大限生きていくしかないと思いました。最後に、映画のエンディングのシーンで取り上げられた締めめのメッセージを皆さんに伝えたいと思います。「今日は、たとえ大した日ではなくても、私は、何かえらいことがあったと感じる（筆者翻訳）」。もしかしたら、私たちが平凡な日々を過ごしたことこそが、既に素晴らしいことかもしれません。

Yee Hang Chong



エリザベタ ベルサーチェ教授

行動神経科学者
クイーンメアリー・ロンドン大学
Alan Turing Fellow



エリサベタ・ベルサーチ博士は動物と人工知能の領域で活躍された行動神経科学者です。思想の源を解明するため、様々な生物の誕生の段階から持ったスキルを研究しています。現在は、ロンドンクイーンメアリー大学の研究グループに所属しています。ベルサーチ博士はAlan Turing Fellowとして認められた上、2021年英国の王立協会フェローに王立協会リーヴァーヒューム・トラスト・シニア研究フェローシップを受賞されました。

エリザベタ・ベルサーチェ教授は、講義で動物と科学技術の関わり分野について参加者に紹介しました。他の現代社会の様々なものと同じように、科学技術は動物たちに様々な目的でますます活用されています。動物福祉（アニマルウェルフェア）や動物の生活環境の向上、大農場でのロボットによる農業の自動化などがそれに含まれます。

しかし、科学技術と動物の関係性は、単なる一方通行の関係ではありません。ベルサーチェ教授は新しい技術をいかに動物の研究に活用することができるかを研究しています。思考実験を通じて、教授は人工知能（AI）をより「賢く」するために研究者たちが繋ごうとしている人間の知能とAIの隔たりを示しました。教授自身の研究所での生誕直後の動物の生態の実験は、様式の認知や抽象的な概念の一般化などの特定のプロセスがAIのシステムにヒントをもたらしました。

講義の核は、動物実験を実証する倫理的指針、彼女の日常の研究での指針についての議論でした。その中で最も重要なのは、実験の基本を作る3R、代用（Replacement）、削減（Reduction）、改良（Refinement）です。3Rは動物の苦痛・犠牲を最小限化し、動物の福祉を最大限化するために、研究者に実験に使用される予定の動物の代用や削減、そして後々の実験の改良を求めています。

彼女の講義にて最も重要なことの一つは、動物と科学技術の関わりにおいての倫理指針がどれほど大きいものであるかです。制限を持たない倫理の議論は、人間の倫理は変わらないものではないということの認知、そしてそれらの指針が人類と研究の進歩に見合うことを保証する必要性を暗示しています。質疑応答にて挙げられた質問の一つに、3Rが1950年代に確立されたものであるため、その適正についての議論がありました。教授は動物の権利の運動が最近の数十年でどれほど発展したか、実験の情報の透明性など3Rに関しての新しい倫理的構想が発達してきていることを説明しました。

私は、継続的発達精神によって倫理観の制限のない議論が行われていることは良いことと感じると同時に、動物は当然ながらこの議論に参加することができないことを必ず認知すべきだと思います。これは、人類が動物の視点の考慮を全ての方法を使い、さらにもっと倫理的な義務を果たす必要があることを意味します。教授はこれについて質疑応答で触れ、動物が人類と同じ好みや価値観があると誤って前提にしてはいけないことを気づかせました。動物の福祉を向上させる際には、私たちは人間の福祉をそのまま疑うことなく適応させたりなどしてはなりません。例として、研究室で使われるひよこに適した環境の提供についての言及がありました。人類の視点では、ひよこは綺麗で衛生的、異臭のしないリノレウムの床を好むと考えるかもしれませんが、実はひよこは掴むことができるような網目状の床を好み、滑らかで綺麗な床は方向感覚を失わせてしまうものなのです。

最後に、教授はイギリスでの実験に使われたひよこの寄付を妨げたイギリスとイタリアでの規制の矛盾について話しました。これは私にとって、動物の権利と倫理を考える際に動物の福祉の法律制定者と活動家は国境を越えた視野が必要である理由を学んだ良い例です。外国での最善の実験方法を研究することで、動物との関係性を変えるための重要な考察が得られるかもしれません。

Nicole Doyle



ジョディー ギンズバーグ氏

Internews Europe CEO
Index on Censorship 元CEO

ジョディー・ギンズバーグ氏はInternews Europeの最高経営責任者として務めておられます。その前は検索作者やアーティストの作品発表、そして言論自由キャンペーンを中心にしたIndex on Censorshipの代表取締役でもありました。また、ギンズバーグ氏はロンドン支局長としてReuters News Agencyに外国特派員とビジネスジャーナリストで長く務めておられました。それに加え、ギンズバーグ氏はDemosシンクタンクと女子教育チャリティーCamfedなどの組織で務めた経験もあります。現在は、Global Free Expression Network IFEXの評議会とGlobal Network Initiative重役会、そして国際ニュースメディアなどでも言論自由についてコメンテーターとして活躍されています。

ジョディーギンズバーグ氏は、プライバシーなど、本質的に他の重要な権利と対立する関係に表現の自由が存在するという広まった神話に異議を唱えることからこの講義を始めました。彼女は、この情報時代には表現の自由とプライバシーは双方が強化される共生関係に存在するということを強調しました。彼女はジョンステュアートミルの、自由な考えの交換は進歩的な存在であるための人間の永遠の関心に必須であるという思想を持ち出しながら、そもそもなぜ表現の自由を重んじるのかを考慮することを気づかせました。

加えて、ギンズバーグ氏は、有害な言論だけが防止されるように言論を規制するのは簡単であるが、そうでなければ合法的な表現の繁栄を可能にするのは簡単だと考えることに対して警告しました。有害な言論や間違った情報を無くすための法は簡単に（そしていくつかの国ではいつも）、政治的目的のために合法的な表現を検閲するために改ざんされてしまいがちです。

その上、表現の自由への需要の減少を導いたインターネットの問題は、そもそも技術的なものではなく、人間的であることを、ギンズバーグ氏は強調しました。それゆえ、アルゴリズムやフィルターなどの技術的な解決策を探そうとしてしまいがちです。ギンズバーグ氏はその例として、アメリカの公立図書館に導入されたフィルターについてのElectronic Frontier財団による研究を挙げました。元々は子どもを守るためだったにも関わらず、フィルターはわいせつな内容をブロックすることに失敗した上、間違ったくさんの無害、または若者の喫煙を撲滅するためのウェブサイトなどの役に立つ情報をブロックしていたのです。

このことを聞いて、ロシア、ハンガリー、シンガポールなどいくつかの国でLGBTをテーマとするメディアがどれほど合法的に「大人向けコンテンツ」をして扱われていて、完全に年齢に合った情報がまだ年齢が足りていないとして封印されてしまったり、公然と検閲されてしまったりしていることについて考えさせられました。このような状況で、私はソーシャルメディアの企業によって導入された年齢制限のフィルターが差別的な法律を強化させてしまい、そのような法がLGBTのコミュニティを主流から外し、LGBTの若者を遠ざけてしまうことを危惧しています。

質疑応答では、ギンズバーグ氏が最近問題となっている「キャンセルカルチャー」へのニュアンスの不足に対しての批判をしました。表向きでは表現の自由を守る活用をされているのに対して、「キャンセルカルチャー」という言葉は同時に、有名人や企業への説明責任を求める合法的な声を転向させ、うやむやにすることにも使われています。私はこの意見に賛成し、一定の行動に対してすでに存在する言葉を使う方が生産的であると考えます。例えば標的とされたハラスメントや悪意のある情報公開などは表現の自由に対して明らかに有害ですが、ボイコットなどの他の合法的抗議運動はソーシャルメディアでの有名人のプラットフォームの移し替えの問題などの理由により未だに議論の余地があります。適当な表現を使うことによって、現在の「キャンセルカルチャー」の曖昧な不安の議論に関する二極化した流れに流されることなく、問題に正しく対応できるでしょう。

最終的に、表現の自由を侵害することなくインターネットの様々な問題に対応するために簡単な法的、技術的な解決策に頼ることができないのであれば、どんな望みを持つことができるでしょうか。ギンズバーグ氏は変化への可能性はソーシャルメディアやオンラインでの交流の中心となる私たちにかかっていると強調しました。私たちはオンラインで自らの身を守り上手くウェブサイト閲覧するためのスキルを教育することで自身をエンパワーさせなくてはなりません。個人的に、私は巨大なソーシャルメディアの前に人気だったウェブフォーラムのような小さいオンラインへの帰還を歓迎します。これらのフォーラムは、トップダウン方式のソーシャルメディアの管理者よりも安全なオンラインの交流を行う上でより優れたコミュニティに基づいた専門の管理者がいます。

ギンズバーグ氏の講義から一つ重要なメッセージを共有するとしたら、それは「反対側にはいつも人間がいる」ことを忘れてはならないということです。ミルからの引用にもあるように、表現の自由が大事であるからこそ、それが人間を傷つけないよう、利益をもたらすためのものであるよう、私たちは自らのオンライン上の言動に責任を持たなくてはなりません。

Nicole Doyle

文化交流会

昨年には、私たちは新型コロナウイルスに対する対応として初めてのオンライン会議を開催し、全体として成功しましたが、私たちは参加者同士の繋がりをより強力なものにするために参加者間の会話と交流の時間を作りたいと考えました。そのため、本年度はSaturday Socialを行いました。Saturday Socialは両国間の時差を考慮してJapan Social, UK Social, UK + Japan Socialと名付けられた3つのセッションで成り立っています。

Japan Socialは13:00~15:15 (JST) / 05:00~07:15 (BST)に開催され、日本語話者と日本語を学んでいる人などを対象に全て日本語で行われました。イギリスでは朝早くの時間だったこともあり、参加者は皆日本からでしたが、日本の大学に留学している学生、英国の大学に通っている者の一時帰国している学生なども集まり、国際的な会になりました。それぞれ1時間ずつ、フリートークセッションとオンラインゲームセッションを行いました。フリートークセッションでは、zoomのブレイクアウトルームセッションを使用し、約15分ごとに参加者の入れ替えを行いました。オンラインゲームとしては、絵を描くゲームである”Gartic”を使用しました。このイベントでは参加者と実行委員皆が互いについてより深く知る機会となりました。イベント後のアンケートから、多くの参加者がイベントに満足し、またイベントを行いたいとの要望があったため、会議期間中に再びフリートークセッションを設けました。

次に、イギリスでの新型コロナウイルスの状況が好転していることもありUK Socialは対面で行われました。このイベントは午後にロンドンのメルカート・メトロポリターノで行われました。UK socialでも、英国の大学に在籍する日本人やイギリス人、そしてその他の国籍の学生が集まり、カジュアルな雰囲気の中話をして互

いに交流を深めました。特にパンデミックによりこのような活動が以前にはできなかったことを鑑みると、実際に会い、フォーマルな会議の外で話すことは参加者に多大な影響を与え、そして良い時間を過ごしたと考えています。

最後に、UK + Japan Socialが10:00~12:00 (BST) / 18:00~20:00 (JST)に開かれました。UK + Japan Socialでは、自己紹介、そしてフリートークセッション、オンラインゲームセッションを1時間ずつ取りました。会議のレクチャー外で、改めてきちんとした自己紹介の機会を持ってもらうことで、参加者同士の友情を深めることを狙いとしました。自己紹介とカジュアルなフリートークセッションを通して、参加者は互いのことをより知ることができ、また、出身国間の興味深い会話を行うことで文化交流も経験することができました。オンラインゲームでは、英国と日本をテーマとして実行委員がお題を作成した絵を描くゲーム”Gartic”や、最近英国・日本でともに人気である”Among Us”を行いました。このゲームは、参加者がよりフレンドリーな形で交流することができる素晴らしいものとなりました。全体として、Saturday Socialを通して、私たちは互いとより強い繋がりを作ることができ、楽しくよりよい時間を共有することができました。

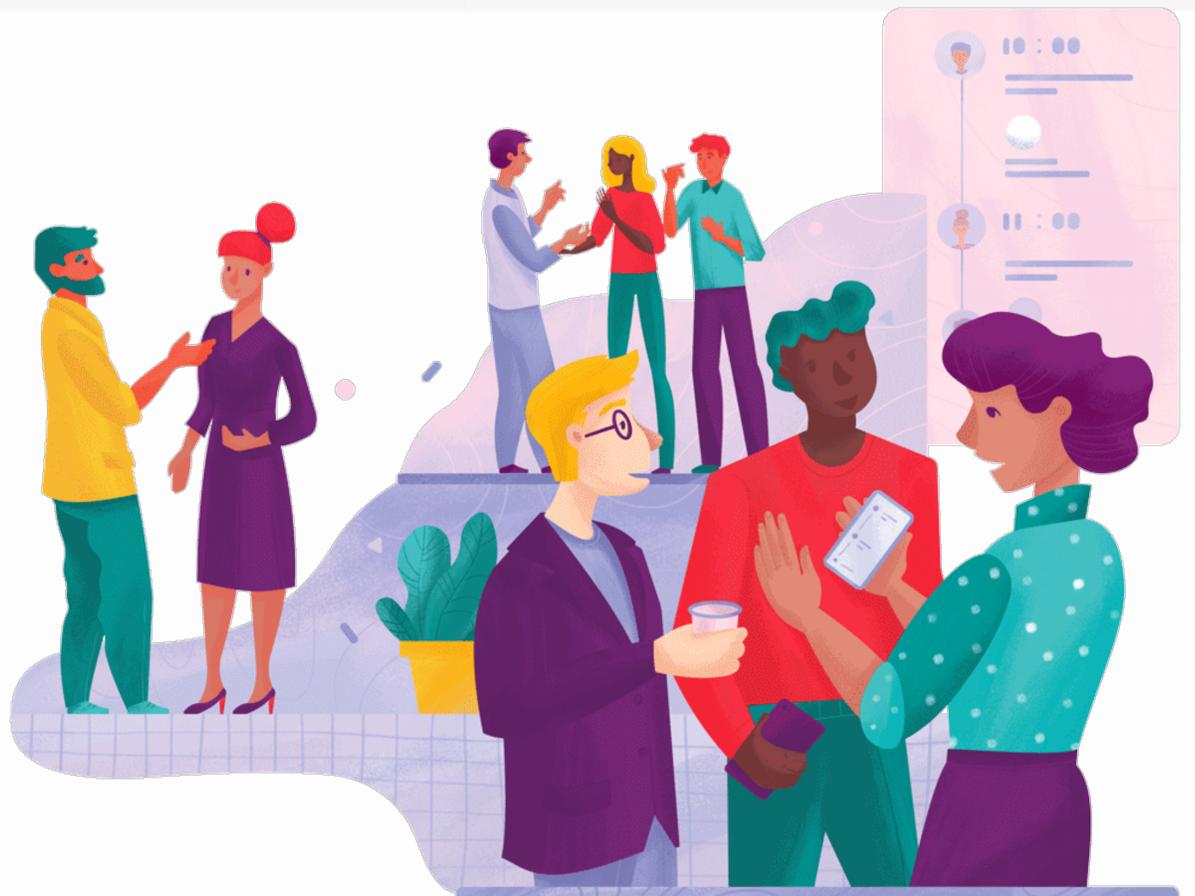
Mizuho Ina



会議の詳細

主催者

Madalina Benderschi	University College London	BSc Anthropology
Ayaka Naota	University College London	MA Legal and Political Theory
Haleigh Kling	City University London	MA Culture, Policy and Management
Aidan Gilbert	University of Edinburgh	BA Japanese Studies
Nicole Doyle	University of Oxford	BA History and Politics
Kanako Hara	University of Cambridge	BA Land Economy
Yume Araki	Sophia University	BA International Legal Studies
Mizuho Ina	Nanzan University	BA American and British Studies
Eliana Harrigan	Imperial College London	MSc Environmental Technology
An Yokota	King's College London	BSc History and Political Economy



参加者

Akihiro Watanabe	University of Tokyo	Economics
Angel Rose	University of Kent	Medieval and Early Modern Studies
Brahma Mohanty	University of Oxford	History
David Watson	Aston University	International Business, French and Spanish
Govinda Finn	University of Kobe	Economics
Holly Web	University of Cambridge	Japanese Studies
Juri Iijima	University of Tokyo	Liberal Arts
Koh Karube	St. Louis School of Milan	Economics
Koki Matsuzawa	De La Salle Manila College of Saint Benilde	Human Resource Management
Mai Sugimoto	Queen Mary University of London	Medicine
Miku Matsubara	Sophia University	International Business and Economics
Momoko Nakamura	University of Yamanashi	Medicine
Motoki Nakagaki	Hosei University	History
Qinyi Liu	University of Edinburgh	Social Research
Risa Takagi	Tokyo Woman's Christian University	International Relations
Yee Hang Chong	Shiga University	Economics
Yoshiho Nishikawa	Doshisha Women's College of Liberal Arts	International Studies, Liberal Arts
Yuichi Masaoka	University of Tokyo	Arts and Sciences

終わりに

「倫理と科学技術」というテーマのもとオンラインで開催された2021年第6回日英学生会議は8月26日に幕を閉じました。私たちは「科学技術」が意味するものを広く解釈し、「人間の幸福度を高めるにはどうしたら良いか」、「人間、動物そして地球に優しい世界にするにはどうすれば良いか」、そして「AIの利用に厳格な倫理原則を組み込むことで科学の進歩を確かにすることができるのか」など様々な問いに答えようとしてきました。

オンライン開催となって2年目の今年は、新たな挑戦と刺激的な試行錯誤の場となりました。会議の形式や経験をよくするために、手探りで成功に向けて働きかけてくれた、情熱とモチベーションで溢れた実行委員の皆様へ感謝します。同様に、エッセイと面接という応募プロセスを経て、事前セッションにも参加し、そして何よりも夏休みの一部をこのプログラムに捧げてくれた参加者の皆さんにも感謝しています。参加者にとって、知的好奇心を刺激する有意義な1週間となったことを願っています。

また、講演して下さった、Zak Weston氏、Robert Black氏、Aaron Gertler氏、Shahrar Ali氏、Andy Miah教授、Emmanouil Tranos氏、Elisabetta Versace氏、Jodie Ginsberg氏、皆様に深く感謝いたします。講演者の方々は非常に寛大で、講演自体も私たちの心にしっかりと刻み込まれ、この会議が終わった後もずっと私たちの思考を形成し続けるでしょう。私たちは共有していただいたその知恵を行動に移していきたいと思えます。

日英学生会議は、日頃から弊団体へお力添えいただいている、公益財団法人双日国際交流財団様、独立行政法人国際交流基金様、ベネッセコーポレーション様、Route H様、Global Learning Center様、そして日英文化交流会様のご協力なしには実現しませんでした。財政的に困難な年に、皆様の信頼とご支援を賜りありがとうございました。これまで築いてきたご縁、そして本会議実現に向けたご支援に心から感謝申し上げます。最後になりますが、今年の最終報告書を作成して下さったMandalina Benderschi様、Yee Hang Chong様、Nicole Doyle様、Ina Mizuho様、Angel Rose様、Mai Sugimoto様、David Watson様に心より感謝申し上げます。今後の会議でもお馴染みの顔ぶれが揃うことを期待しています。"Building the Future, Together"をテーマに議論が展開される2022年のUK-JPにぜひご参加ください。

